様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 1 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１５２００４５
研究課題名（和文）　中国占術理論の形成

研究課題名（英文）　A Study of the Formation of the Divination Theories in China

研究代表者
武田　時昌（TAKEDA　TOKIMASA）
京都大学・人文科学研究所・教授
研究者番号：50179644

研究成果の概要（和文）：中国における占術は古い起源を有し、多種多様な発展を遂げた。その占術の理論的な形成を考究するために、近年に出土した竹簡、帛書を手がかりにして、先秦から漢に至る古代の占術を遡及的に分析し、理論の構造的把握を試みた。そして、当時の自然科学の基礎理論との関連性を検討し、中世、近世の術数書にどのように継承されたかを考察することによって、先秦の方術から中世の術数学への変容過程を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The divination in China has the old origin and accomplished various development. In order to carry out investigation of the formation of the divination theories, I tried to find out the concrete picture of the divination in the ancient period, and to grasp its structure, through the manuscripts on the bamboo slips and silks that were excavated from the remains of the pre-Qin and early Han in recent years. In addition, I clarified relevance with the basic theories of natural science of those days, and considered how it was extended in the books of shushu from medieval to modern times. As a result the change process from the magical science in the pre-Qin period called fangshu to the study of shushu was clarified.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２０１０年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１１年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：
科研費の分科・細目：哲学・中国哲学
キーワード：中国哲学・中国の占術・方術・術数学・陰陽五行・日書

１．研究開始当初の背景

中国における占術は、文化人類学者や道教研究者を中心として研究がされてきた。歴史的な考察に関しては、澤田瑞穂『中国の呪法』（平河出版社、1984）、坂出祥伸『中国古代の占法 ： 技術と呪術の周辺』（研文出版、1991）、松本浩一『中国の呪術』（大修館書店、2001）等の専著がある。また、暦注に見られる占いは、渡辺敏夫『日本の暦』等の著作によって詳しく紹介されており、天文暦学に関する近年の研究に、西澤宥綜『敦煌暦学綜論 ： 敦煌具注暦日集成』（上中下３巻、私家版、2004-2006）、成家徹郎著『中国古代の天文と暦』（大東文化大学人文科学研究所、2006）

などがある。
　ところが、それらの研究は、フィールドワークの調査報告や文献での事例を集録したものであり、総合的な見地から占術の理論的な枠組みを明確にし、数理的な分析を試みたものではない。数少ない例外として、陰陽道における六壬の占術を解明した小坂眞二『安倍晴明撰『占事略決』と陰陽道』(汲古書院、2004) があるが、それも中国の術数書にまで遡及するわけではない。
　中国占術の淵源は、先秦の方術にある。それについて、『淮南子』『論衡』等に断片的な論述が記載されているが、これまで全貌はほとんどわからなかった。ところが、近年に出土した竹簡、帛書によってようやく具体的な様相を窺うことができるようになった。すなわち、一群の日書（九店楚簡、雲夢秦簡、放馬灘秦簡、孔家坡漢簡、銀雀山漢簡等）や馬王堆帛書の『刑徳』『陰陽五行乙篇』『式法』等には、先秦の占術理論が大いに展開されており、陰陽五行説の初源的言説が見られる。
　それらについては、中国の李零、胡文輝、劉楽賢、陳松長、日本の池田知久、工藤元男、名和敏光、フランスの Marc Kalinowski 等の諸氏による数多くの研究がある。ただし、中世以降の術数書との関連性を指摘するものがいくつか存在するが、簡帛研究を主とするものであるので、占術理論の形成をめぐって本格的な議論を展開するには至っていない。
　以上の研究によれば、中国占術の具体的実相をそれなりに窺うことができる。しなしながら、占いを非科学的な呪術、迷信として当時の科学知識と切り離して議論しようとする傾向にあり、占術と科学との理論的な関連性を深く掘り下げようとするものではない。そのような研究が十分になされないのは、科学思想史アプローチによる構造的な把握を試みようとする論究姿勢に欠如しているからである。研究を遅滞させている最大の要因は、「術数学」と呼ばれる学問分野がほとんど未開拓のままに放置されているところにある。
　術数学とは、自然科学の諸分野と易を中核とする占術とが複合した中国に特有の学問分野である。今日のように科学と迷信をはっきりと峻別していたわけではなく、サイエンスの域を逸脱した言説も数多く存在するが、数理的思考や博物学的考察を繰り広げる場がそこにあった。
　ところが、これまでの科学史、思想史研究においては、種々の占術は象数易とともに疑似科学として考察対象の枠外に置かれ、科学史研究者にも思想史研究者にも閑却されたままになっている。しかしながら、西欧近代科学に対峙する中国伝統科学を構造的に把握しとうとするならば、術数学というコンセプトにおいて科学と占術を包括的に考究すべきである。
　筆者は、近年において、中国科学思想史を構想するなかで術数学研究に着手している。これまでの研究において、術数学関連の著作を系譜化し、その学問的輪郭を明確にすることを試みた。その研究成果は、第 6 回日韓科学史セミナー（2006 年 9 月 21-23 日開催）や 2008 年度日本科学史学会（2008 年 5 月 24 日研究発表）において、中国科学を研究する上で術数学というコンセプトが重要であることを提言した。また、その主要論旨をまとめた論考を「The Formation of the Study of Shushu 術数 and its Development in the Middle Ages: A Tentative Study of a Field of Scientific Study Peculiar to East Asia」と題して日本科学史学会欧文誌（HISTORIA SCIENTIARUM）に発表した。また、『五行大義』を読解する共同研究会を立ち上げ、陰陽五行説の中世的展開に関する考察を進行させており、陰陽五行を用いた諸理論を体系的に整理することに着手し始めたところである。

２．研究の目的
　中国占術は古い起源を有し、亀卜、占筮、天文占、夢占、八風占、式占、風水など多種多様な発展を遂げた。今日の科学合理主義から見れば、そこには世俗を惑わすあまたな迷信、虚妄が渦巻いている。国家的な天体観測に依拠する占星術のように学問として認知され、官僚体制に組み込まれるものもあったが、当時においても巫術、方術、詭道、鬼術等と呼ばれて、異端視されたところがある。
　しかし、俗流文化のなかの中心的存在として人々の関心を集めたこと、とりわけ自然探求への興味を喚起した役割は、注目すべきものである。現代社会において占術が姿を消してしまったかというとそういうわけではなく、むしろどの時代よりも横行しているかもしれない。東西を問わず、古代人が天象と人事、神と人間との間に想定した因果関係は完全に否定されているにもかかわらず、旧式のままの星座体系を用いたホロスコープ占星術はテレビ番組や大衆雑誌のお決まりの情報になっており、人々の暮らしを楽しくする文化要素で有り続けている。
　そのことは、占いを行うという行為が、人間に固有の文化的行動様式の一つであることを示唆するものである。そうした見地での研究は、占術への評価に新しい視座を供給するように思われる。
　しかも注目すべきことに、中国では科学と占術が複合的に絡み合って、術数学という特異な学問分野を形成した。天文暦法や鍼灸医療においても、占術的な要素を排除するのではなく、柔軟な態度で取り込もうとしており、ユニークな科学文化を発展させた。中国科学のパラダイム形成を考えるならば、陰陽五行

説が説明原理として共通に用いられており、科学理論と占術の数理構造との相互関係を十分に吟味しなければならない。

術数学の学問的な起源は先秦の方術にある。漢代になると、陰陽五行説を政治思想に取り込むことによって生起した思想革命を経て、方術から天文暦学、数学、医薬学といった自然科学が自立していく。ところが、方術的な自然探求のあり方がすっかり廃れてしまうわけではなく、中世、近世において子部術数類に分類される書物＝術数書が多数著され、術数学と呼ばれる特有の学問分野に発展を遂げる。

中世、近世の術数書において展開されている諸技法は多様な形式をとっているが、その数理を分析すると、漢代に盛行した天文暦数学や京氏易と密接な関連性があり、その起源は先秦にまで遡及できる。また、日本に残存する陰陽道史料を検討すると、暦占いや医療の禁忌や呪いは、古代の占術理論によって定式的に導出された配当説に依拠していることも注目すべきである。しかも、現存する占術書の多くは最終的な占断や配当結果だけを記したものばかりであり、初源的な数理は後世に十分に伝わらず、埋没しているものも数多い。

ところが、先秦から漢代にかけての占術について、近年に出土した竹簡、帛書には、具体的な事例やその理論的基盤である陰陽五行説に関する新しい情報が満載されている。しかも、後世の術数書との強い連続性を指摘することができる。したがって、先秦から漢代にかけての出土簡帛を読解することで、その数理を遡及的に推察することが可能になったのである。

また、中国科学の理論形成は、これまで漢代に成立した科学書を起点として語られてきた。すなわち、数学では『周髀算経』『九章算術』、天文暦学では『漢書』律暦志掲載の三統暦、鍼灸医学では『黄帝内経』、本草学では『神農本草経』等である。ところが、出土簡帛には、数多くの科学書が含まれており、黎明期の科学文化に関する新証言が得られた。とりわけ、『九章算術』や『黄帝内経』の前身となる著作が見出され、秦から前漢の太初暦に改暦するまで施行していた顓頊暦に惑星運動論が展開されることが判明するなど、これまでの通説を大いに覆す衝撃的なものであった。それらについては、個別的な研究がなされているが、黎明期の科学文化を総合的に扱う研究はまだ行われていない。

そこで、本研究は、術数学研究の一環として、中国における占術理論の形成過程を明らかにするために、出土簡帛に展開された占術を遡及的に分析し、その数理の解明を試み、中世、近世の術数書にどのように継承されたかを検討する。とりわけ、科学思想史的なアプローチによって、当時の科学知識との関わりを明らかにし、科学と占術のあいだの相互作用を考察することによって、両者が複合的に絡み合った術数学が先秦の方術からどのように形成され、中国科学的パラダイムを創出していったかを検討するところに研究の主眼がある。

３．研究の方法

中国占術の理論を考察するにあたって、対象となる資料は、次の３種に大別できる。

(1) 遊神による方位占い、日選び
(2) 天文占、雲気占、八風占
(3) (医療などの) 禁忌、呪い

それぞれは複合的に絡み合っているが、関連する資料はそれぞれに異なっているので、３年間の各年度において個別に考察した後に、総合的見地から検討を加えることにする。

(1)～(3)の具体的な研究対象は、以下の通りである。

(1) 遊神による方位占い、日選びに関する日書、馬王堆帛書とそれに関連する論述を後世の術数書（『五行大義』、暦注や陰陽道資料など）から集録し、データベース化したうえで、その内容を読解し、理論的な考察を試みる。とりわけ、一群の日書（九店楚簡、雲夢秦簡、放馬灘秦簡、孔家坡漢簡、銀雀山漢簡等）と後世の術数書や陰陽道資料との比較によって、太歳、太陰等の天を遊行する諸神がどのような方式で配当されているかを探り、『五行大義』を手がかりにして、六壬、遁甲、太一、九宮といった諸術に対する理論的な考察を試みる。また、顓頊暦、殷暦や緯書、京氏易および漢代の思想文献（『淮南子』『春秋繁露』『論衡』など）との関連性についても十分に検討する。

(2) 天文占、雲気占、八風占に関する日書、馬王堆帛書（『五星占』『天文気象雑占』『刑徳』等）とそれに関連する論述を、後世の資料（天文占（『開元占経』『乙巳占』等）、兵書（『太白陰経』『武経総要』）から集録し、データベース化したうえで、その内容を読解し、理論的な考察を試みる。とりわけ、天文占、風角および兵陰陽との理論的な繋がりを吟味し、方術から術数学へと変容する過程を明確にする。また漢代の災異説、緯書の天文説との関連性も十分に検討する。

(3) 日書、馬王堆帛書『胎産書』『南方禹藏図』『養生方』における医療の禁忌、呪いに関する占術及び後世の医薬書（『千金方』『医心方』等）の関連する論説を集録し、データベース化したうえで、その内容を読解し、理論的な考察を試みる。とりわけ、医療と呪いに内在する数理や理念、身体観を『医心方』を中心として吟味する。

なお、考察に際しては、諸本のテキストを校合し、『五行大義』『医心方』や陰陽道資料に引用された佚文、参考文等を集め、それぞれ電子テキスト化する。さらに、関連する研究情報を内包させた汎用データベースを作成する。

中国占術の分析にあたっては、幅の広い専門知識が必要とする。そこで、思想史、科学史関連の研究者を集め、日書・術数書を会読する共同研究会を組織し、読解ワーキングを月１回程度開催する。

また、簡帛資料の方術研究を推進する中国人研究者、近年に韓国で発足した術数学学会の中心メンバーを招聘し、相互の研究情報を交換するシンポジウムを開催するとともに、国際的な共同研究体制を構築する。

４．研究成果

(1) 中国古代占術の数理的考察

中国占術の主要な技法やその理論的基盤について、関連資料を集めてデータベース化したうえで、数理構造の分析を試みた。3 年間において試みた具体的な主要な考察対象は、以下の通りである。

①五音の五行説配当
②刑徳遊行説
③日書の占術理論
④古四分暦の数理構造とその応用
⑤黎明期の医療文化

①から③は、中国占術の代表格であり、納音、歳徳、歳刑、十二直等として後世に継続的に受け継がれ、暦注の記載事項になったものである。しかし、最終的な配当説だけが伝えられていたために、その数理は見失われていた。ところが、出土簡帛の出現によって、その起源が先秦にまで遡ることが判明し、配当方式や運用方法について、初源的な数理を推察することができるようになった。

④⑤は、先秦から漢に至る天文暦学、医薬学の基礎理論を、新出土資料を読解することによって遡及的に考察し、中国占術にどのような理論的影響を与えたのかを考察したものである。

具体的な考察結果を要約すると次のようになる。

①五音の五行説配当：

天水放馬灘秦簡、随州孔家坡漢簡、臨沂銀雀山漢簡等の『日書』における五音説について、釈文と図版によって本文を校勘し、注釈を施した汎用データベースを作成した。そして日書や『鶡冠子』に見られる五音配当の異説に着目し、また放馬灘『日書』における音律の配当説と占術を数理分析することで、五行への配当方式の初源的数理を明らかにし、音律理論との関連性を探った。また、日書に見られる納音説を検討し、その配当の数理について後世の解釈を整理しながら推察した。前者の考察の一部は、ワークショップで口頭発表し、『陰陽五行のサイエンス』に掲載した。後者は現在、投稿準備中である。

②刑徳遊行説：

後世の歳徳、歳刑として知られる刑徳二神の占術理論について、馬王堆帛書『刑徳』甲本・乙本・丙本の三種のテキストと『陰陽五行乙篇』とを校合したうえで、読解を試み、その起源と数理構造を考究した。それらの成果は、ワークショップで口頭発表し、その一部について「日本中国学会」に掲載した。テキストを校合し、原説を復元した結果を含む総合的な考察は、すでに草稿にまとめたので、近々成果報告として公表するつもりである。

③日書の占術理論

３年間の研究成果を総合する形で、九店楚簡、放馬灘秦簡、睡虎地秦簡、孔家坡漢簡、銀雀山漢簡等の日書に展開された占術理論を総合的に研究した。そして、中心的な占術の手法である孤虚、十二直、叢辰等について、作成した占術書基礎文献データベースを活用して、その配当方式の数理構造の解明を試みた。考察結果はすでに草稿にまとめ、投稿準備中である。

④古四分暦の数理構造とその応用

中国占術の理論的基盤となっている古四分暦について、その数理構造を明らかにすることに努めた。とりわけ、秦漢の占術理論と最も関連の深い顓頊暦について、馬王堆帛書『五星占』を中心として数理的に考察し、『淮南子』天文訓、『史記』天官書、『漢書』律暦志等と比較することで、顓頊暦から太初暦、三統暦、四分暦へとどのように発展していったかを明確にした。また、『漢書』律暦志に掲載されている二十八宿の距度よりも以前の古星度について、復元を試みた。さらに、惑星観や太歳紀年法、五星会聚説が占術の理論にどのように応用されているかについて検討を加え、漢代思想への影響を考察した。その考察結果は、日本科学史学会、術数学東京ワークショップ等で口頭発表を行い、得られた考察結果の一部は、「東方学報」京都、「中国思想史研究」に発表した。

⑤黎明期の医療文化

馬王堆漢墓、張家山漢墓から出土した多数の医薬書、養生書『胎産書』『南方禹藏図』『養生方』を読解することで、『黄帝内経』成立以前の医療文化を考察し、そこに用いられている呪いや占術に言及した。そこでの考察結果に基づいて、「医道の日本」において「鍼灸パラダイム談義」というテーマで毎月の連載コラムを掲載した。

(2) ワークショップ、シンポジウムの開催

日書・術数書の読解に際しては、その方面の研究者を集めて共同研究会を月 1-2 回程度開催した。

それに加えて、各年度に国内外の研究者を招聘して研究集会を開催した。大規模な会議としては、2010 年 1 月 9 日、2011 年 9 月 9 月 4 日に大正大学巣鴨学舎にて術数学東京ミーティングを開催した。また、2012 年 2 月 2-4 日には、韓国術数学学会の中心メンバー6 名（李東哲・李容周・趙仁哲・朴権寿・徐大源・全勇勳）を含む国内外の研究者を招いて日韓術数学研究及び東アジア占術研究に関する国際ワークショップを開催した。そこでは、3 年間の研究成果を発表し、活発な討論を繰り広げるとともに、国際的な共同研究体制の構築に向けた協議を行った。

また、2011 年 10 月より 3 ヶ月間、研究所の客員教授として招聘した陳松長教授（湖南大学岳麓書院副所長）を講師として、岳麓書院所蔵秦簡を中心とする特別講演会＆研読会を催した（12 月 3 日、1 月 7 日）。そこでは、今後に中国占術、術数学に関する日中共同研究プロジェクトの推進について、話し合った。

国外での研究会議＆調査については、2009 年 12 月 22 日-28 日に、大阪産業大学の古算書研究会のメンバーとともに中国に渡航し、長沙、武漢において近年に出土した簡牘資料の調査を行うとともに、岳麓書院、湖南省考古学研究所、武漢大学簡帛センター等で現地の研究者と研究集会を催し討論を行った。また、2010 年 9 月 21 日-27 日に、長沙の岳麓書院で整理中の秦簡古算書『数』に関する国際ワークショップに参加し、北京で資料調査を行った。

以上のような 3 年間の研究を通して、中国占術理論に対して、科学思想史的なアプローチによる数理的考察を行い、理論的な形成と展開を窺うことができた。本研究は、術数学の総合的研究を行うためのフレームワークである。得られた研究成果については、日本科学史学会、日本道教学会、日本出土資料学会等の国内の主要な学会で研究発表を行い、研究の意義や共同研究プロジェクトの立ち上げを提言した。今後は研究対象を術数学全般に拡充し、その本格的な総合研究を推進したいと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 20 件）

(1) 武田 時昌、鍼灸パラダイム談義第 15 回～流れる水のように生きる―東洋的健康科学論（一）、医道の日本、822、査読無、2012、194-195

(2) 武田 時昌、鍼灸パラダイム談義第 14 回～馬医絵巻の眼差し―獣医鍼灸学のすすめ（二）、医道の日本、821、査読無、2012、162-163

(3) 武田 時昌、鍼灸パラダイム談義第 13 回～牛馬のツラとツボ―獣医鍼灸学のすすめ（一）、医道の日本、820、査読無、2012、298-299

(4) 武田 時昌、鍼灸パラダイム談義第 12 回～鍼のひびきと脳内モルヒネの唄、医道の日本、819、査読無、2011、168-169

(5) 武田 時昌、鍼灸パラダイム談義第 11 回～今こそ虚労病の新薬を！―老化現象を考える（四）、医道の日本、818、査読無、2011、204-205

(6) 武田 時昌、鍼灸パラダイム談義第 10 回～老子と彭祖の長生術―老化現象を考える（三）、医道の日本、817、査読無、2011、186-187

(7) 武田 時昌、明末清初の西学啓蒙と象数学、堀池信夫編『知のユーラシア』（明治書院）、査読無、2011、27-53

(8) 武田 時昌、刑徳遊行の占術理論、日本中国学会報、査読有、63、2011、3-7

(9) 武田　時昌、鍼灸パラダイム談義第 9 回～死徴の診断術―老化現象を考える（二）、医道の日本、816、2001、査読無、200-201

(10) 武田 時昌、鍼灸パラダイム談義第 8 回～ミイラの呪文、閻魔大王の便り―老化現象を考える（一）、医道の日本、815、査読無、2011、174-175

(11) 武田 時昌、鍼灸パラダイム談義第 7 回～血と骨のフォークロア―『洗冤録』の複眼的考察、医道の日本、814、査読無、2011、156-159

(12) 武田 時昌、鍼灸パラダイム談義第 6 回～魯迅の眼で見た中医―東と西の解剖学、医道の日本、813、査読無、2011、172-175

(13) 武田 時昌、鍼灸パラダイム談義第 5 回～未だ病まざるを治す―鍼門の三字銘、医道の日本、812、査読無、2011、158-159

(14) 武田 時昌、鍼灸パラダイム談義第 4 回～脱黄帝学派宣言―鍼道を志す人のために、医道の日本、811、査読無、2011、194-197

(15) 武田 時昌、五星会聚説の数理的考察（下）―秦漢における天文暦術の一側面、中国思想史研究、32、査読無、2011、印刷中

(16) 武田 時昌、鍼灸パラダイム談義第 3 回～東アジア伝統科学の想像力～漢代における思想と医療の大革命、医道の日本、810、査読無、2011、230-232

(17) 武田 時昌、鍼灸パラダイム談義第 2 回～東アジア伝統科学の想像力～第二回五藏六腑という小宇宙、医道の日本、809、査読無、2011、226-227

(18) 武田 時昌、鍼灸パラダイム談義第 1 回～東アジア伝統科学の想像力～第一回鍼こそ中国の三大発明!?、医道の日本、808、査読無、2011、278-280

(19) 武田 時昌、五星会聚説の数理的考察（上）―秦漢における天文暦術の一側面、中国思想史研究、31、査読無、2010、1-32

(20) 武田 時昌、太白行度考―中国古代の惑星運動論(一)、東方学報京都、査読有、2010、1-44、京都大学学術情報リポジトリにて公開 http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/131791/1/jic085_1.pdf

〔学会発表〕(計 9 件)
(1) 武田 時昌、術数学研究プロジェクト構想、東アジア占術研究ワークショップ（日韓術数学ワークショップ「東アジア術数学研究の現状と課題」第 2 日目)、2012/2/3、同志社大学室町キャンパス寒梅館 6 階大会議室、
(2) 武田 時昌、道教文化研究の術数学的アプローチ、日本道教学会第 62 回大会、2011/11/12、筑波大学メディアユニオン・メディアホール
(3) 武田 時昌、日書の科学知識―先秦方術から術数学へ、術数学東京ミーティング 2011、2011/9/4、大正大学巣鴨校舎 1 号館
(4) 武田 時昌、天の時、地の利を知る科学中国暦術の数理構造、天地人研究会（国際高等研プロジェクト)、2011/6/21、国際高等研セミナー室 1
(5) 武田 時昌、二十八宿古星度試論、日本科学史学会第 58 回年会、2011/5/29、東京大学教養学部 13 号館
(6) 武田 時昌、黎明期の科学文化―簡帛資料の新証言―、日本出土資料学会平成 22 年度第 1 回例会、2010/7/17、東京大学本郷キャンパス
(7) 武田 時昌、黎明期の中国数学 ―新出土古算書から『九章算術』へ―、日本科学史学会第 57 回年会・総会、2010/5/29、東京海洋大学品川キャンパス
(8) 武田 時昌、『五行大義』再読と新出土史料、東京ミーティング 2009、2010/1/9、大正大学巣鴨校舎 1 号館
(9) 武田 時昌、中国古代における惑星運動論の数理構造、日本科学史学会第 56 回年会、2009/5/23、九州大学工学部

〔図書〕(計 1 件)
武田 時昌編著（他 17 名による共著)、京都大学人文科学研究所、陰陽五行のサイエンス思想編、2011、320（論文「五音と五行―音楽理論と占術のあいだ―」を分担執筆、3-31)

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件)
○取得状況（計 0 件)

〔その他〕
(1) 武田研究室 HP（データベース＆研究会日程等を公開)
http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~takeda/
(2) ＮＨＫ京都放送番組「京いちにち　ラブ・ラボ」にて研究者紹介（タイトル：陰陽道のルーツ・中国古代科学を探求する～京都大学人文科学研究所　武田時昌教授)、2011/11/16（18:25 より約 20 分間放映)

６．研究組織
(1)研究代表者
武田　時昌（TAKEDA TOKIMASA)
京都大学・人文科学研究所・教授
研究者番号：50179644
(2)研究分担者
なし
(3)連携研究者
なし